

令和6年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学校名	校長名
99	川崎市立長沢小学校	中西 薫子

学校教育目標		今年度の重点目標		
はてな いっしょにね すばらしいな がんばるぞ ぶれないぞ 自分から考え、進んで学習する子 助け合い協力する子 楽しいものや生きものを大切にする子 いっしょに元気で明るい子 責任をもってやむく子		～夢に向かって学ぶ学校～ 自己肯定感と主体的・対話的・探究的・創意的な子の育成 「主体的・対話的に深い学びの実現に向けた授業改善」「教育活動全体を通した自己有用感の醸成」「一人一人の児童が「居場所」(関わり)を感じられる学校」		
評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策	
学び合う学校	1 授業改善 (能動的な学び)	校内研究を中心に「深い学び」の実現を目指し、「主体性を連続させる工夫」「考えを深めたり、広げたりするための表現活動」「知識や技能の活用を実感する」「見直し、振り返る活動」を位置付けた授業づくりに取り組み、授業力の向上に努めた。話す・聞くについては、学年ごとの目標設定を行い、成果が見られる。書く力については、課題である。振り返る力を学年に応じてつけていきたい。	振り返る活動を学年に応じた方法で工夫し、各教科で位置付け、書く力の充実を図る。語彙を豊かにするために読書活動の充実を目指す。授業のユニバーサルデザインについて共通理解を図り、子どもたちの認識を意欲した発問、板書等の見直しを行い、分かる授業、楽しい授業づくりの実現に取り組む。授業のユニバーサルデザインについて、共通理解を図り、授業づくりに取り組んでいく。	
	2 授業改善 (カリキュラム・マネジメント)	地域や学校の特色、児童の実態を生かした体験活動を位置付け、「社会に開かれた教育課程」を編成する。	地域を材にした学習を継続し、カリキュラムの充実を目指す。各学年の取組を共通理解し、内容の重複を見直す。活動が形骸化しないように、資質・能力の側面から見直し、内容の更新ができるようにする。保護者、外部人材との連携を記録し、有効な活用を図る。体験的、探究的な学習を核にして、各教科の関連を図り、横断的なカリキュラムの創出に取り組んでいく。	
	3 授業改善 (基礎・基本の徹底)	基本的・効果的な指導や指導方法を共通理解し、徹底することを通して基礎・基本の定着を図る。	ステップ2・3の実現を目指しGIGA端末の効果的な活用(情報モラルを含む)を生かした授業改善を図った。GIGA端末の効果的な活用には課題がある。学習習慣の確立と授業のユニバーサルデザインの共通理解を図り、分かりやすい授業づくりに取り組んだ。モジュールの活用や教育ボランティアの配置を図り、学年に応じた基礎的な知識・技能の定着を図った。	授業改善の手段としてGIGA端末の活用を検討していく。モジュールでの計算タイムの継続と効果の検証を行う。保護者の理解と協力を広げるために、学年により、学校により活用して情報を発信したりボランティアの協力を募ったりする。GIGA端末を活用した家庭学習、基礎・基本の定着のための学習を充実させる。基礎・基本の定着には保護者の理解と協力が不可欠である。保護者にも情報発信をしていく。
元氣あふれる学校	4 学級経営	規律ある学年、学級経営のもとで、規範意識と自己肯定感を土台とした自己有用感、自己効力感の醸成を図る。	「違いを認め合い、みんなと共に生きていく力」「よりよい集団や社会をつくろうとする力」「なりたい自分に向けてがんばる力」を育成し、一人一人が居心地のよい学級づくりの充実を努めた。朝会等で多様性、寛容性について繰り返し話し、子どもたちの意識に定着してきた。その意識を自分の行動や言動に生かしていくことが課題である。	学年会を中心に情報交換を行い、クラスルームの運営、学年集会の充実を図りながら、よりよい学級経営に向けて担任相互で学び合える機会をつくっていく。学級経営と学年経営の相作用を図る。学年タイムの充実に向けて、学年主任を中心とした情報交換を行う。話を聞いて考えることだけでなく、行動や活動の中で規範意識を発揮し、実践力を高める。
	5 特別活動	特別活動を中心として子どもたちの創意を生かした自主的・自治的な活動を保障する。	児童の創意、発意に基づき見直しをもった係活動、当番活動、委員会活動、クラブ活動、代表委員会、行事の充実を図り、発達の段階に応じた自主的・実践的な活動を工夫した。一定の成果がある中で、児童の活動は活発になっているが、教員が次のステップを明確に共有し、具体的な活動を行っていることが課題となる。	学級目標の実現のために学級会や学級活動に取り組むことを意識し、学年に応じて自分の学級の課題を把握し、解決に向かう体験を積み重ねていられるようにする。利他的である児童のよさを生かして、自己有用感、自己効力感へと高めしていく。
	6 学級指導	心と体の健康や安全への意識を高めるために健康・安全・防災教育の推進を図る。	健康・安全(食事、体力、健康管理、交通安全、防災意識)と日常生活を結び付け、自分の成長や安全、よりよい生活のために自発的、主体的に実行しようとする自己指導能力を育成した。避難訓練では、意識高く避難行動に取り組む様子が全校で見られる。食育では、栄養教諭の授業での学習が日常生活に継続されていくことが課題である。給食の残量を減らす取り組みも行っていきたい。	特に食育の充実に取り組む。保護者と連携して、授業で行ったことを継続して食生活の見直しにつなげられるようにする。給食調理員、保護者、地域との連携も図りながら、児童の実態から立ち上げた課題解決に取り組んでいく。安全、防災教育については総合的な学習の時間の単元等と関連させながら、新たな取組を行っていく。
笑顔あふれる学校	7 児童指導	一人一人の児童の居場所づくりに努める。互いの違いを認め合い、尊重する寛容性を育み、助け合える関係づくりに努める。	不登校や登校しぶりの早期発見に努め、学習支援室等を有効活用しながら個々の児童の状況に応じた対応や取組を迅速に行った。支援教育コーディネーターを中心とした情報共有やケース会議が行われており、教員も協働体制がとれていることを実感できている。本校の強みであると捉えている。	別室の運営を安定させられるように、職員の共通理解を図っていく。担任、学年を中心に、支援教育コーディネーター、養護教諭、管理職等が支援しながらチームで問題対応に迅速に取り組んでいく。
	8 効果測定、共生*共育	不登校・登校しぶり、いじめの未然防止に向けて効果測定、共生*共育、学校生活アンケート等の有効活用を図る。	効果測定や共生*共育を活用し、学級経営の充実を図った。児童会を通じた児童の発想を生かしながら、児童指導見直し強化月間・人権週間等の効果的な取組を年間を通して見直しをもって行った。	共生*共育は実施したことが日常生活に生かされることを意識して取り組む。実施することだけが目的にならないよう意識を大切に。職員会議での児童の情報交換や児童指導見直し強化月間、人権週間を活用し、全職員で課題を共有しながら、児童指導にあたるようにする。
	9 道徳・人権尊重教育・キャリア教育	人権尊重教育、道徳の授業と学校生活との関連を図り、道徳的実践力を高める。また、道徳の授業と学校生活との関連を図り、道徳的実践力を高める。また、自分の成長を振り返ることを通して、夢や希望をもって学校生活を送ることができるようにする。	生活目標、保護者、地域の人・もの・こと等を活用し、道徳の授業を充実させるとともに、道徳で学んだことを学校生活で発揮することに努め、相手意識をもった道徳的実践力の向上を図った。また、キャリアパスポートを活用し、子どもの成長を家庭と共有してきた。朝会や集会を活用し、学校全体で生活目標を共有し、各学年の取組に生かそうとすることができた。土曜参観では、人権週間の取組として、児童会主導でいじめ防止に取り組んだり、道徳の授業を保護者に公開したりした。	道徳の指導内容と生活目標を連動させたり、朝会の内容を関連させたりしながら、道徳的実践力の育成に取り組む。関連することが目的とならないように、成果を常に検証しながら見直しをしていく。児童支援、授業改善、児童活動の三つの部会の担当者が協働する必要がある取組なので、プロジェクトの活性化も目的に据えながら活動していくように促していく。

信頼される学校	10	情報発信 学校の取組を効果的に発信し、保護者や学校教育推進会議を中心とした地域の学校運営への理解と協力を仰ぐ。	学校の取組を保護者や地域に積極的に発信し、理解と協力を求める。情報発信の手段として学校HP、学校だより、学年だより、学校公開(T.T.保護者参加、外部講師等の工夫)、行事を有効に活用できるようにした。令和7年度学校運営協議会の発足を目指して準備を進めた。	次年度も授業を公開する機会をできるだけ実施できるようにしていく。特に学年だよりの内容の充実が課題である。各行事では取組の意図を具体的に伝えて実施の都度アンケートをとり、意見をフィードバックしていくようにする。配信メール、HPを活用し、効率のよい情報発信の在り方を探っていく。次年度は学校運営協議会を設置し、学校運営のついて多面的な意見を取り入れていく。保護者への発信も丁寧に行い、関心を高めていく。
	11	学校評価 実効性のある学校評価を工夫し、外部からの意見を学校運営の改善に効果的に活用する。	学校運営方針と校務分掌の関連を明確にし、保護者や地域との協働を意識した学校評価を工夫した。学校評価のポイントは上がっているが、設問と学校の具体的な取組を連動させることが十分にできていないと感じている。	学校評価の回答率をあげる。「分りにくさ」が回答のしにくさにつながっている面を見直し、教育活動の分かりやすさと回答のしやすさを目指す。
	12	外部人材の活用 外部の専門家等を活用して、求められる教育を工夫していく。	求められる教育の方向性を踏まえ、外部の専門家や講師、保護者ボランティアとの積極的な連携を図った。保護者ボランティアの協力を増やすことで、学校の取組へ協力する意識を高めた。	PTAと連携して、保護者ボランティアの活用について共通理解し、基礎学力の定着を目標に、重点的な配置を行っていく。
	13	服務規律 教育公務員としての自覚を高め、働きがいのある職場環境の創出に努める。	児童理解の感度、人権意識を高め、不登校、いじめの未然防止、早期発見に努め、児童の範となる言動・行動に一層努めた。授業改善、学年・学級経営、学校運営の充実を通して同僚性を高め、学び合う職員集団としての協働体制の確立を目指した。職員会議で対話の時間を設定したり、自主調査を活用して内省の時間をとったりした。「ポジティブな行動様式」「リトリートメント」等、新しい教育の情報を職員会議で取り上げ、情報発信に努めた。職員がよく挨拶をし、児童の手本になっている。	全市的な動向を伝えて市の施策、教育委員会としての考え方の中に学校や自分の教育活動があることを考えさせる。自主調査等を活用し、職員相互で働きやすい職場の在り方について考えさせる。学年経営の充実を重点課題とする。学年主任育成のシステムづくり、総括教諭の役割の明確化等人材育成の充実を図る。OJTを充実させる。
	14	問題解決能力の育成 学校運営方針と学年・学級経営、自己目標との関連を図る。	学校運営方針を踏まえた学年・学級目標、グループ目標、個人目標を明確に設定できるように工夫した。学校運営方針と校務分掌の連動を意識し、役割を明確にして、自己目標を設定できるようにした。学年経営案、学級経営案を十分に活用できていない。	一人一人の役割が学校運営を担うという意識をさらに高めていく。失敗を恐れずに自分たちで考えて挑戦できるように校務分掌の単位を小さくし、経験の浅い教員もリーダーとなって役割を果たせるようにしているが自分のやりたいことが明確にならない、具体的な手立てが講じられない職員にはより丁寧な指導が必要である。自己観察書を中心にした目標設定を行っていく。学級経営案の簡素化を図る。
	15	教員研修 学ぶ機会を的確に捉えて自己研鑽を図る。また、必然性を共有できる職員研修を主体的に企画・実施する。	必然性のある研修を主体的に計画、実施できる人的・時間的・物的環境を整えた。自主的な研修が行われ、学び合う姿が見られた。授業研究会に間に合わない地理的な状況の中で、優先順位をつける等の工夫を行い、学ぶ意欲を保障できるようにしていきたい。	自発的な研修の機会を今年度同様に自分たちでつくっていくように促す。研修が単発にならないように、PDCAとなるように計画する。小教研の授業参加がしやすいように調整する。
	16	組織の見直し・働き方改革 目的に向かって方法を創出できる、挑戦できる組織づくりを目指す。働き方改革・仕事の進め方改革の方向性を踏まえ、効率的な会議、事務処理の在り方・職場環境等を検討する。	話し合いの目的を明確にして、教職員の対話、議論するスキルを高めるように努めた。一人一人が働き方改革の意識をもってアイデアを出し合い、校務の改善に努めた。アイデアを出したり新しいことに挑戦しようとするためのスキルを学ぶ機会を設けることやロールモデルとなる職員の存在が必要であると感じている。	会議の短縮には、職員の話し合いのスキルの向上が必須である。問題解決的な提案の仕方、話し合いの仕方のスキルは授業力向上へもつながると考える。一人一人のスキルの向上へのプロセスが仕事の効率化につながると意識を高めた。担当者からの意見をもとに校務分掌の組織を見直ししていく。
17	学校運営の体制づくり 全教職員で学校の児童全員の安全を守り、教育活動に関わっていくとする体制づくりを推進する。	積極的な交換授業等指導体制の工夫・改善により、学校・学年・学級経営の充実を図った。3年生以上では交換授業が定着し、評価の負担軽減や学年全体で児童を見ることができている。また、学校全体で児童を育てようとする意識が見られ、級外の職員も児童のためによく動いている。共通の意識をもって学校内がよく整頓されていることも児童の落ち着いた学校生活に結びついている。	創立50周年の取組や改修工事の対応に職員が協働して取り組むことを通して学校としての組織力を高めることができるように意識しながら取り組む。	

学校関係者の評価	今年度の学校運営のまとめ・次年度へ向けて
<ul style="list-style-type: none"> 学校の取組に対して、保護者が一定の評価をしていることが学校評価から分かる。 学力の面で学習状況調査等から課題が見られるとのことだが、長沢小学校の子どもたちのよさを生かすことを大切にして教育活動を行ってほしい。学校教育推進会議で発表をする高学年の児童が、学校全体のことを考えていること、はきはきと発表することは、教育活動の大きな成果である。 令和7年度の創立50周年の行事については、地域と協力していきたい。時代の変化に応じた教育活動の中に位置付けることになるということは理解できる。地域の思いを子どもたちに伝え、よりよいものにしていきたい。 報道されていることから教職員の働き方や健康に懸念がある。子どもたちのために、教職員が笑顔で教育活動に取り組めるような環境づくりに尽力してほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> 全職員が学校運営方針をよく理解し、自分の役割をしっかりと果たすことを意識して教育活動に取り組むことができた。保護者からも一定の理解を得られていると学校評価の結果から分析している。成果が見られる点、課題となる点について、保護者の評価は妥当性がある。課題を丁寧の共有、分析して次年度の目標設定に生かしていく。 特に力を入れた児童活動では長沢小学校の子どもたちのよさである活動への意欲を生かすために、児童会を中心とした委員会活動や学級会を核とした学級活動に力を入れてきた。代表委員会が活性化し、児童を主体とする活動が活発になったことは成果である。話し合うことや協働して課題解決を図ることに好感度をもっている児童が多いことは、これまでの取組の成果である。 校内研究の生活科、総合的な学習の時間を中心に学校独自のカリキュラムの充実を図ることができた。地域の人材を生かした単元開発ができたことは50周年の周年行事に向けて大きな成果であると捉えている。 GIGA端末を活用した授業改善、基礎・基本の充実、力を入れて取り組んでいるが引き続きの課題である。全職員で情報共有をしながら取り組んでいく。 一人一人の教職員の人権感覚を磨くことがあらゆる対応の根幹であると捉えている。教職員は温かい接し方や言葉かけを意識し、児童の寄り添った対応を心がけている。相互に学び合う中でさらに教職員の意識を高めていきたい。「働き方改革」が児童に笑顔で接するための方策であることを改めて確認し、なくすこと、新たに立ち上げること、減らすこと等を職員が自分たちで主体的に考えられるようにする。